

きらめき人

集う、企業家たち

豊かな海産物をより魅力ある商品へ

東 日本大震災後に大手飲料メーカーの支援を受け、漁協の女性部、いわゆる「浜のお母さんたち」によって立ち上げられたのが「おぶくろの味研究会」。「魚市場キッチン」の屋号のもと、町の海産物を手作りで加工した缶詰の製造販売を行うこの団体で、事務局を務めているのが中村悦子さんだ。

取り扱う海産物はさまざまで、町の特産品のタコやカキ、ホヤやムール貝など。それぞれをニンニクとオリーブオイルで調味したアヒージョや、しょうゆ麹煮、水煮、トマトソース煮など、これまで無かった新しいバリエーションを展開。

中村さんは神奈川県藤沢市の出身。東北には以前旅行で来たことがある程度だったという。南三陸を訪れたのは数回目的ボランティアでのこと。漁業のお手伝いで出会った漁師さんに強く心を打たれたと話す。

「ボランティア中の漁師さんたちのおもてなしや、人に対する真つすぐさ、仕事にかける熱い気持ちに心を打たれました」。そして移住を決断し、2016年5月に地域おこし協力隊で着任しました。

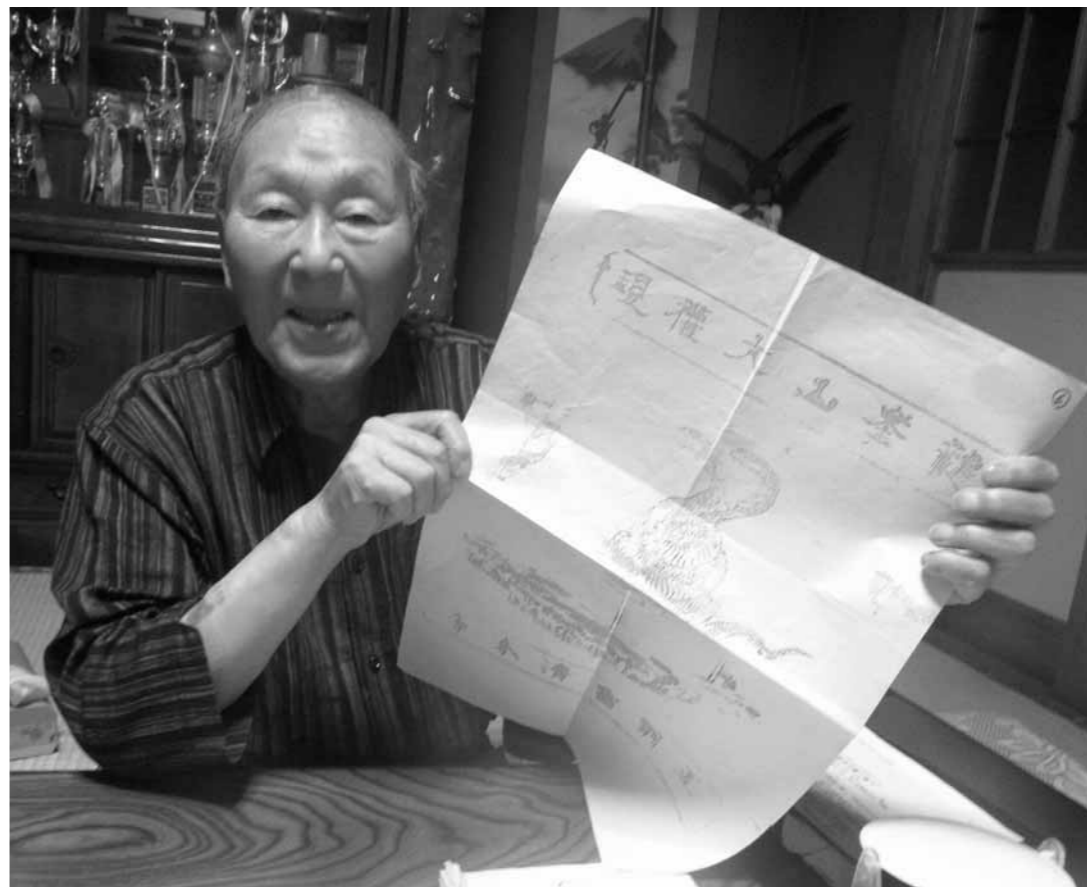
「今年度で協力隊の任期は終了ですが、来年以降もこの町に住み続け、おいしい海産物を食べて、ワインを飲んで、大好きな町の人たちと笑って楽しく過ごしたいです」と輝く海を眺め語っている。

ETSUKO NAKAMURA



この町の自然に魅了され、化石を掘りに行ったり、釣りに行ったり、アクティブな日常を過ごしている。

なかむら 悦子さん



昭和7年5月生まれ。歌津町出身。元歌津町助役、町史編纂委員。40年間の公職で、手書きの広報（公民館報）発刊や貴重な歴史的資料収集にも尽力された。

MINORU ONO

田 東山って何て読む？
歌津に関わる人にはなじみだけど、初めて見る人は絶対読めないはずだと笑いながら、『たつがねさん』の由来や田東山にまつわる文化を丁寧に教えてくれます。

「ある大学の研究チームが化石調査のために来町した際、一緒に発掘した骨の一部が世界最古のものとして認定され『ウツギヨリウ』と名付けられてね、その時の研究員が教授になったんだぞ」と我が事のように目を細めて語ってくれました。

また、町史編纂さんに尽力しながら、使われなくなった農家や漁師の生活道具などを集めて民俗資料館も作ったと胸を張って振り返ります。役場退職後は、得意の調査や執筆に没頭。このままでは地域の言葉が消えてしまうと危惧し『方言とことわざ』（164ページ）をなんと460部自費出版。

さらには、両親や親類から伝え聞いていた「歌津仇討物語」を文字起こししたいと一念発起。家族の理解と協力を受けて『お房のよろめき』というタイトルにし、自筆の文字で発刊しました。こちらの書籍も友人知人から好評で、在庫はなくなっただろうです。

昔から気さくで明るい性格、誰からも慕われる小野さんは、地域の中でも信頼が厚い好々爺として元気に過ごしています。歌津の歴史・文化、何でも聴いてみずべ！

おの 実さん

歌津のことは何でも聴いてけさいん！